

## 2. 受託調査研究・外部機関との共同研究及び外部資金による研究一覧

研究課題	研究代表者	頁
受託 文化遺産国際協力コンソーシアム事業	川野邊渉	117
受託 文化遺産国際協力拠点交流事業（アルメニアおよびコーカサス諸国等における文化遺産保護に関する拠点交流事業）	川野邊渉	118
受託 文化遺産国際協力拠点交流事業（キルギス共和国及び中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業）	川野邊渉	119
受託 文化遺産国際協力拠点交流事業（ブータン王国の伝統的建造物保存に関する拠点交流事業）	友田正彦	120
受託 文化遺産国際協力拠点交流事業（ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業）	川野邊渉	121
受託 国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務	岡田健	122
受託 特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務	岡田健	123
受託 第37回世界遺産委員会における審議資産概要一覧表の作成	川野邊渉	124
受託 第37回世界遺産委員会審議調査研究事業	川野邊渉	125
受託 装飾古墳の保存に関する調査研究事業	岡田健	126
受託 文化財（美術工芸品）等緊急保全活動・現況調査事業	岡田健	127
受託 第38回世界遺産委員会における審議資産概要一覧表の作成	川野邊渉	128
受託 文化遺産保護国際貢献事業（ツバル・キリバス・フィジーの文化遺産保護に関する技術的調査）	川野邊渉	129
受託 ユネスコ／日本信託基金 シルクロード世界遺産登録に向けた支援事業	山内和也	130
受託 ユネスコ／日本信託基金 バーミヤーン遺跡保存事業	山内和也	131
受託 ユネスコ／日本信託基金 タンロン・ハノイ文化遺産群の保存事業	友田正彦	132
受託 エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズⅡ）にかかる国内支援業務	山内和也	133
受託 小石川後樂園得仁堂収蔵物の保存修復科学的な調査研究	北野信彦	134
受託 水浸した日本画の修復方法に関する調査研究	岡田健	135
受託 絵金屏風の保存修理に関する調査研究	岡田健	136
受託 関西大学博物館および考古学研究室保管 奈良県高市郡明日香村牽牛子塚古墳出土夾紵棺一括の修理	北野信彦	137
受託 松平定信《細写 物語歌書『源氏物語』》の収蔵箱の保存に関する調査研究	佐野千絵	138
受託 ラチャプラディット寺院の螺細扉修復計画策定のための調査研究	川野邊渉	139
京都市内（平安京跡）出土文化財の保存修復科学的な調査研究	北野信彦	140

航空資料保存の研究	中山俊介	141
伝山内盛豊所用当世具足の文化財科学的調査	北野信彦	142
鎌倉市内（大倉幕府周辺遺跡群）出土資料の保存修復科学的な調査研究	北野信彦	143
イスラーム時代のフルブック都城址出土の壁画断片の保存修復	山内和也	144
古代墳墓の発掘保護に関する日中共同研究	岡田健	145
名所絵によるアルメニアと日本の文化交流	川野邊渉	146
出土漆器からみた桃山文化期における漆文化の解明に関する調査研究	北野信彦	147

## 文化遺産国際協力コンソーシアム事業

### 目 的

文化遺産国際協力コンソーシアムは、「海外の文化遺産保護に関する国内の連携・協力を推進する」という目標のもと、各種分科会活動や情報データベースの構築、シンポジウム・研究会の開催等を行うことによって、日本の文化遺産国際協力を支援・促進する役割を担う。この文化遺産国際協力コンソーシアムの運営を事務局として円滑に進めることにより、日本の文化遺産国際協力活動の支援を行う。

### 成 果

1. 文化遺産国際協力コンソーシアム事業の企画・運営の検討及び計画立案
  - ・運営委員会を2回開催し、活動方針等を協議したほか、2014（平成26）年3月7日には研究会と併せて総会を開催した。
  - ・企画分科会、東南アジア分科会、西アジア分科会、東アジア・中央アジア分科会、欧州分科会、アフリカ分科会、中南米分科会を計14回開催した。
  - ・ミャンマーワーキンググループ会合を2回開催した。
2. 情報共有と情報発信
  - ・一般向けのシンポジウムとして「世界遺産シンポジウム 世界遺産の未来—文化遺産の保護と日本の国際協力」（2013（平成25）年10月26日）を開催した。
  - ・研究会「文化遺産保護の新たな担い手—多様化するニーズへの挑戦」（2013（平成25）年9月5日）、「文化遺産保存の国際動向」（2014（平成26）年3月7日）を開催した。
  - ・報告書『平成24年度協力相手国調査 フィリピン』をまとめた。
  - ・報告書『ブルーシールドと文化財緊急活動—国内委員会の役割 研究会報告書』をまとめた。
  - ・報告書『世界遺産シンポジウム 世界遺産の未来—文化遺産の保護と日本の国際協力 シンポジウム報告書』をまとめた。
  - ・海外での文化遺産国際協力の近況に関し、各海外メディアおよび機関より情報を収集し、メールニュースとして計22回会員に配信した。
  - ・会員向けのデータベースの情報を更新し、研究会案内などをアップし会員との情報共有を図った。
  - ・学生会員制度を運用し、文化遺産国際協力に関わる若手専門家に対する情報発信に努めた。
  - ・広報活動のため、事業紹介冊子および「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の措置に関する方針」（第2次基本方針）冊子の刊行、一般向けウェブサイトのデータ追加を行った。
3. 文化遺産国際協力に関することから
  - ・フィリピン、スリランカ、バーレーンに対して文化遺産保護状況に関する事業の支援を行った。
  - ・第37回世界遺産委員会（2013（平成25）年6月16日～27日）および世界文化フォーラム（2013（平成25）年11月24日～27日）に出席し、情報収集を行った。

### 研究組織

○川野邊渉、原本知実、原田怜、宮崎彩、井内千紗、降旗翔、草薙綾、中山仁美、川嶋陶子、長谷川泉（以上、文化遺産国際協力センター）、後藤多聞（客員研究員）

### 備 考

当事業は文化庁より委託された。

## 文化遺産国際協力拠点交流事業(アルメニアおよびコーカサス諸国等における文化遺産保護に関する拠点交流事業)

### 目 的

我が国と長期的な関係の構築が望ましいと考えられる国・地域において文化遺産の保護に重要な役割を果たす機関等との交流および協力を通じて、人材養成を行う。アルメニア文化省及びアルメニア歴史博物館を相手国機関とし、アルメニア歴史博物館が所蔵する考古金属資料の保存修復・調査研究活動を通じ、アルメニア及びコーカサス諸国等の若手保存修復家の育成と技術移転を目的とした事業である。特に考古金属資料を対象とし、日本側の保存修復専門家の指導のもとでドキュメンテーション、保存修復、展示・公開、モニタリング・報告書出版に関する一連の作業を行う人材育成ワークショップを開催する。

### 成 果

2013年度はアルメニア共和国に2回のミッションを派遣し、「アルメニア歴史博物館における考古金属資料の保存修復」に関する合計3回(国内2回、国際1回)のワークショップを実施した。3年目にあたる今年は保存修復処置および予防保存をテーマとしている。

1. 2013(平成25)年6月12日～6月25日に第4回国内向けワークショップを開催し、2012(平成24)年度に引き続きアルメニア歴史博物館に収蔵されている資料の保存修復処置を日本人専門家と共同で行った。
2. 2014(平成26)年1月23日～24日に第5回国内向けワークショップを開催し、これまでのワークショップにおいて保存修復処置を終えた金属資料について、展示計画を策定し、展示の準備を実施した。
3. 2014(平成26)年1月15日～21日に、グルジア、イラク、カザフスタン、キルギス、ロシアから6名の保存修復専門家を招聘して、アルメニアを中心とするコーカサス諸国およびその周辺諸国等の考古金属資料の保護に関わる専門家間の情報交換および広域ネットワーク構築を目的とした第3回国際ワークショップを開催した。最初の2日間は国際セミナーを開催し、保存修復や考古金属資料に関する講演、各国参加者の所属機関における予防保存の取り組みについての発表を行った。引き続いて、日本人専門家が講義と実習を実施し、博物館における環境制御、IPM(総合的有害生物管理)、展示収蔵のための材料試験法について講義と実習を行った。

以上の3つのワークショップには延べ24名の若手専門家が参加した。

### 研究組織

○川野邊渉、山内和也、藤澤明(以上、文化遺産国際協力センター)、犬塚将英(保存修復科学センター)、邊牟木尚美、有村誠、釘屋奈都子(以上、客員研究員)、鈴木稔(帝京大学大学院)、園田直子(国立民族学博物館)、鈴木恵梨子(保存修復専門家)

### 備 考

本研究は、文化庁より委託された。

## 受託研究

### 文化遺産国際協力拠点交流事業（キルギス共和国及び中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業）

#### 目 的

我が国と長期的な関係の構築が望ましいと考えられる外国のしかるべき機関に対し日本国内の機関が行う人材育成・交流事業について、我が国の文化遺産保護への積極的な国際貢献を行う。将来的な中央アジアの文化遺産保護を目的とし、中央アジアの若手研究者の人材の育成を目指す。キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所を相手国機関とし、アク・ベシム遺跡を実習地に「ドキュメンテーション」、「発掘」、「保存修復」、「史跡整備」に関する一連の人材育成ワークショップを実施する。

#### 成 果

事業の初年度であった2011年度（平成23年度）には、文化遺産の「ドキュメンテーション」をテーマに計2回の人材育成ワークショップを実施した。

事業の2年度目である2012年度（平成24年度）には、「発掘」と「保存修復」をテーマに計2回のワークショップを実施した。

事業の3年目に相当する本年度は、「発掘」と「保存修復」と「史跡整備」をテーマに年2回のワークショップを実施した。まず2013年（平成25年）8月27日から9月12日にかけて、第5回ワークショップ「遺跡の発掘と出土遺物の保存修復と史跡整備に関する人材育成ワークショップ」を実施した。ひき続き2014年（平成26年）2月10日から15日にかけて第6回ワークショップ「出土遺物の保存修復に関する人材育成ワークショップ」を実施した。この2つのワークショップには延べ23名の研修生が参加した。

#### 研究組織

○川野邊渉、山内和也、安倍雅史（以上、文化遺産国際協力センター）、間舎裕生（客員研究員）

#### 備 考

本研究は、文化庁より委託された。



土器の修復を行う研修生

## 文化遺産国際協力拠点交流事業（ブータン王国の伝統的建造物保存に関する拠点交流事業）

### 目 的

ブータン王国内務文化省文化局を相手国拠点とし、石造または版築造と木造との複合構造である同国の民家および寺院等の伝統的建造物を対象として、それらの文化遺産としての歴史的価値付けと耐震性評価に向けた建築学的、構造学的調査、および材料実験等を共同で実施することにより、効果的な技術移転と人材育成の促進を図る。

### 成 果

2013（平成25）年度は、以下の日程により2度の専門家派遣を行った。

- ・2013（平成25）年6月21日～7月3日：建築工法及び構造調査（建築及び構造分野9名）
- ・2013（平成25）年10月19日～28日：建築工法及び構造調査＋ワークショップ（建築及び構造分野7名）

前年度に引き続き、伝統的建築技法の特質を解明するための工法調査と、伝統的工法によって建設された建造物の構造的特性、特にその耐震性能を定量的に評価するための構造調査の2つのアプローチにより実施している。型枠内で土を突き固めることにより壁体を構築する版築造の建物を調査対象とし、首都ティンプーのほか、パロ、ウォンデュポダン、プナカの各県において、版築による伝統的建設技法に関する現地調査や簡易的な実測、職人への聞き取り等を行ったほか、版築造民家及び寺院での常時微動計測も実施した。

本年度は新たに、実大の型枠を用いた版築壁の施工実験を行ったほか、コアドリルを用いて実際の建物や試験体から採取した土壁供試体の圧縮・引張強度試験等をブータン側と共同で実施し、建築的構造的評価及び解析のための基礎的なデータ収集を行うとともに、調査や実験の方法及び手順について、現地スタッフへの技術移転に努めた。

第2回派遣時に現地で開催したワークショップでは、これまでに実施してきた調査成果を共有するとともに、既往の関連研究成果や、今後行うべき研究の方向性について意見交換を行った。

### 研究組織

○友田正彦、佐藤桂（以上、文化遺産国際協力センター）、亀井伸雄（所長）、江面嗣人、福島孝篤（以上、岡山理科大学）、高品正行（文化財建造物保存技術協会）、青木孝義、鳥澤麻衣子（以上、名古屋市立大学）、富永善啓（㈱文化財構造計画）、宮本慎宏、宇崎佑、勝部祥平（以上、香川大学）

### 備 考

本研究は、文化庁より委託された。なお、解析モデルの作成、構造基礎解析および常時微動解析については名古屋市立大学及び香川大学に再委託して実施した。



版築ブロックの施工実験



焼失建物からのコアサンプル採取

## 文化遺産国際協力拠点交流事業（ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業）

### 目 的

本事業は、ミャンマー連邦共和国文化省考古・国立博物館局（DOA）を相手国拠点とし、歴史的建造物、これに付随する壁画・漆芸等の工芸、考古遺跡・遺物の三分野に焦点を当て、現地への日本人専門家派遣及び日本への同国専門家招聘等を通じて、その調査や保存修復のための手法をミャンマー側に技術移転し、専門的人材の育成に協力しようとするものである。

### 成 果

#### 1. 専門家派遣

- 1-1. 2013（平成25）年6月9日から14日まで、建築、美術工芸の2班からなる7名の専門家を派遣し、協力事業の開始にあたっての合意形成及び実施に向けての準備・調整等を行った。この間、10日には文化大臣に面会し、当方提案内容について基本的に了承を得た。
- 1-2. 2013（平成25）年7月19日から28日まで、考古班の専門家3名を派遣し、ピイ考古学フィールドスクール及びシュリクシェトラ遺跡において遺物調査研究法の素材確認としての現地調査を行った。
- 1-3. 2013（平成25）年10月23日から31日まで、美術工芸班の専門家3名をバガンに派遣し、気象観測装置の設置や壁画の撮影等を行ったほか、漆工の専門家1名がバガン・マンダレーほかにて材料や技法等に関する調査を行った。
- 1-4. 2013（平成25）年11月24日から29日まで、建築班の専門家3名をバガン・マンダレーほかに派遣し、木造僧院建築の保存上の課題把握と研修カリキュラム作成のための調査を行った。
- 1-5. 2014（平成26）年1月19日から26日まで、考古班の専門家3名を派遣し、ピイ考古学フィールドスクール及びシュリクシェトラ遺跡において遺物調査研究法に関する研修及び技術移転を行った。
- 1-6. 2014（平成26）年2月2日から13日まで、建築班の専門家5名をマンダレー及びインワに派遣し、考古局スタッフ等11名を対象として、第1回木造建造物保存研修を実施した。

#### 2. ミャンマー人専門家招聘研修

- 2-1. 2014（平成26）年2月3日から7日まで、DOA職員の保存科学専門家2名を日本に招聘し、壁画の保存修復に関する研修を本研究所ほかにおいて行った。
- 2-2. 2014（平成26）年2月2日から8日まで、DOA職員の考古学専門家3名を日本に招聘し、考古遺跡の保存管理と考古遺物の記録法に関する研修を奈良文化財研究所において行った。

3. 事業成果の概要は、本研究所が運営費交付金事業により別途DOA職員3名を招聘して2014（平成26）年2月18日に開催した研究会「ミャンマーにおける文化遺産保護の現状と課題」において報告した。

### 研究組織

○川野邊渉、友田正彦、佐藤桂、楠京子、山下好彦（以上、文化遺産国際協力センター）、亀井伸雄（所長）、早川典子（保存修復科学センター）、城野誠治（企画情報部）、近藤光雄、東坂和弘、中内康雄、野尻孝明（以上、文化財建造物保存技術協会）、中右恵理子（修復家）、杉山洋、森本晋、石村智、小田裕樹（以上、奈良文化財研究所）

### 備 考

本研究は、文化庁より委託された。招聘を含む考古学分野の事業は、奈良文化財研究所に再委託して実施した。また、建造物分野の事業は、公益財団法人文化財建造物保存技術協会の技術協力を得て実施した。

## 国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務

### 目 的

国宝高松塚古墳壁画の恒久的な保存方針に基づき、壁画の修理および修理環境の保全並びに壁画の劣化原因及び劣化防止対策措置などの調査・研究の業務を実施する。

### 成 果

#### 1. 生物及び環境関連研究

- ・高松塚壁画修理施設の修理作業室等において、定期的に害虫トラップを設置し、浮遊菌調査を実施し、環境の清浄度を確認するモニタリングを継続実施している。修理作業室とそれ以外の修理施設内各所における温湿度の測定も継続して行っている。昨年度、作業室で再びチャタテムシが捕獲されたことから、チャタテムシに関する詳細な調査を実施するとともに、温湿度状況との関連を検討した。2013（平成25）年8月までは施設内の湿度が高かったが、2013（平成25）年8月の空調機のメンテナンスを経て、この湿度上昇の問題が解消されたことを確認した。
- ・茨城県ひたちなか市虎塚古墳で、石材表面に発生した微生物バイオフィルムの解析とUV照射による除去方法の検討を行った。
- ・福岡県うきは市珍敷塚古墳および日岡古墳で装飾古墳の保存環境調査を継続実施した。珍敷塚古墳では保存庫内の温湿度計測を継続するとともに、うきは市が定期的実施するモニタリングへ指導助言を行った。日岡古墳では、冬季に発生する保存施設の内壁の結露への対策を講じるため、保存施設の壁面温度の計測を行った。

#### 2. 修復関連研究

- ・高松塚古墳壁画のクリーニング方法として、以前より行ってきた紫外線照射に加えて酵素を利用した除去方法について検討した。バイオフィルムの分解を目的として酵素を利用するための準備作業として、漆喰や顔料、また修復材料に対する酵素の影響評価を行い、顔料等の色みに変化がないことを確認した。また、酵素を使用する場合の修復材料を選択し、実際の修復処置に適用した。
- ・高松塚古墳壁画に使用されている石灰漆喰を、石材への密着性や強度、現実的な施工手順といった面から捉え、材料の特定や調合分量を考慮したうえでの再現を目指した研究を行なった。日本国内において、石灰漆喰が残存する装飾古墳を視察した。石槨内に残る漆喰片の残留状態や残存箇所、またそれらを取り巻く保存環境に着目し、本研究の参考資料とした。現在の左官技術者の協力を得て、現地調査を行い、石灰漆喰への粘材及び骨材の有無による乾燥後の状態観察、石質板支持体を用いた場合の密着強度への影響などについての確認も行った。

#### 3. 材料技法研究

- ・奈良文化財研究所との共同により、高松塚古墳壁画に対する可視近赤外分光光度計・蛍光X線分析装置による顔料の分析調査、及びマクロ撮影による状態調査を実施した

### 研究組織

○岡田健、佐野千絵、木川りか、早川泰弘、朽津信明、北野信彦、吉田直人、犬塚将英、佐藤嘉則、早川典子、森井順之（以上、保存修復科学センター）、川野邊渉、加藤雅人、山田祐子、楠京子（以上、文化遺産国際協力センター）、大河原典子、前川佳文、酒井清文（以上、客員研究員）

### 備 考

本研究は、文化庁より依頼された。



受託研究

## 特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務

### 目 的

特別史跡キトラ古墳は、高松塚古墳と同様に彩色壁画のある終末期古墳として重要な古墳である。取り外した壁画の保存修復措置および古墳・石室内の保存環境の調査研究、ならびにこれまで採取されたカビ等の微生物の総合調査等、古墳・壁画の保存・活用にかかわる調査・研究の業務を実施する。

### 成 果

#### 生物環境関連研究

- ・25年9月下旬のキトラ古墳の整備作業開始までの間、古墳石室内、小前室の点検を継続し（奈良文化財研究所が現地を担当）、温湿度の計測、及び古墳周辺の気象観測を実施して、観測データのバックアップを取り、管理の体制を敷いた。
- ・施設の埋め戻しに先立って、石室内に設置した気象観測装置等の撤収作業を行った。
- ・25年2月に実施されたキトラ古墳盗掘口のステンレス台取り外しに伴い、盗掘口、閉塞石の微生物サンプルを採取したもののについて、菌叢を調査する目的で微生物分離とその同定及び分離株のアンフル作成を実施した。

#### 修復関連研究

- ・漆喰の再構成を行うために、充填材や接着剤の適用方法を検討した。また、再構成にあたって構成後の表面高さ等の作成方法についても複数の材料と工法を検討し、文化庁及び修復技術者（国宝修理装こう師連盟）と協議した。
- ・現状のキトラ古墳壁画の漆喰を、石材への密着性や強度、現実的な施工手順といった面から捉え、材料の特定や調合分量を考慮したうえでの再現研究を行った。この調査は、高松塚古墳の漆喰研究と関連づけながら遂行した。
- ・キトラ古墳壁画の四神及び十二支について、描かれている絵画を修復時に正確に認識するために、線起こし図の作成を行った。

#### 材料技法研究

- ・奈良文化財研究所との共同により、キトラ古墳壁画に対する可視近赤外分光光度計・蛍光X線分析装置による顔料の分析調査、及びマクロ撮影による状態調査を実施した。

### 研究組織

○岡田健、佐野千絵、木川りか、早川泰弘、朽津信明、北野信彦、吉田直人、犬塚将英、佐藤嘉則、早川典子、森井順之（以上、保存修復科学センター）、川野邊渉、加藤雅人、山田祐子、楠京子（以上、文化遺産国際協力センター）、大河原典子、前川佳文（以上、客員研究員）

### 備 考

本研究は、文化庁より依頼された。

受託研究

## 第37回世界遺産委員会における審議資産概要一覧表の作成

### 目 的

我が国の世界遺産政策を円滑に推進することを目的として、第37回世界遺産委員会で審議される物件と、各物件に対する世界遺産諮問機関（イコモス）の勧告内容についての一覧表を作成する。

### 成 果

2013（平成25）年6月16日～27日にカンボジア・プノンペンで開催された第37回世界遺産委員会に関連して下記の項目を実施した。

1. イコモス（国際記念物遺跡会議）による推薦物件に関する勧告内容一覧の作成（2013（平成25）年5月上旬～下旬）

第37回世界遺産委員会の会議文書が2013（平成25）年5月上旬に世界遺産センターのウェブサイトで公開された後、議題8（世界遺産一覧表の改訂）の会議文書について、全ての推薦物件の名称の仮の和訳を作成した。また、世界遺産委員会の文化遺産の諮問機関であるイコモスからの勧告内容（記載、情報照会、記載延期、不記載）を一覧表とした。

2. 保全状況報告一覧の作成（同上）

1.と同様に審議文書の公開後、議題7（保全状況の報告）の会議文書について、世界遺産一覧表記載物件を有する締約国から定期報告が提出され、第37回世界遺産委員会での検討の対象となる全ての物件の名称を和訳し、一覧表を作成した。

以上で作成した内容は、電子ファイル（Excel形式）で電子メールにより文化庁に提出した。

### 研究組織

○川野邊渉、原本知実、境野飛鳥（以上、文化遺産国際協力センター）、二神葉子（企画情報部）

### 備 考

本研究は、文化庁より依頼された。



三保松原から望む富士山

## 第37回世界遺産委員会審議調査研究事業

### 目 的

世界遺産委員会の審議にあたって、専門的観点による諮問機関（イコモス）の勧告、及び世界遺産委員会審議結果の分析等を行うことにより、今後の我が国の世界遺産政策を円滑に推進することを目的とする。

### 成 果

2013（平成25）年6月16日～27日にカンボジア・プノンペンで開催された第37回世界遺産委員会に関連して下記の項目を実施した。

1. イコモスによる推薦物件に関する勧告内容の分析（2013（平成25）年5月下旬～6月上旬）
  - ・議題8（世界遺産一覧表の改訂）の会議文書で、文化遺産のイコモスの評価、決議案の要約を作成した。また、締約国が作成した推薦書も参照し、評価のポイントや妥当性、着目すべき点についてコメントを作成した。
  - ・各推薦物件に関する知識を有する専門家から同様の見地で意見を求め、あわせて提出した。
2. 世界遺産委員会対処方針作成支援（2013（平成25）年5月下旬～6月上旬）
  - ・議題7（保全状況の報告）の会議文書で、文化遺産の審議対象物件のイコモスの評価、決議案の要約を作成した。また、イコモスの現地調査報告書や専門家の意見も参考に、1.と同様にコメントを作成、提出した。
3. 世界遺産委員会での情報収集と議事概要の作成（2013（平成25）年6月中旬～7月上旬）
  - ・第37回世界遺産委員会に参加、本会議の全議題と作業指針の作業部会で、発言国・組織ごとに発言内容を記録した。我が国から推薦した「富士山」の審議では、発言記録を審議終了後ただちに文化庁に送付し、報道発表資料の作成の支援を行った。
  - ・発言内容の記録は議事概要としてまとめ、会期終了1週間後に提出した。
4. 審議における議論の内容及び決議の分析と提言、報告書作成（2013（平成25）年7月中旬～9月末）
  - ・3.に基づき議題7、8の議事をまとめた。あわせて上記1.および2.で作成した資料を要約、添付した。本事業に関連する議題11（手続規則の改訂）、12（作業指針の改訂）についても議事をまとめた。本会議での審議全体に関する概要と審議の傾向を簡略にまとめ、提言を記した。文化庁より成果利用の許諾を得て、各地方自治体の世界遺産、文化財担当部局に報告書を配布した。

### 刊行物

- ・『平成25年度文化庁委託 第37回世界遺産委員会審議調査研究事業』330p 13.9

### 研究組織

○川野邊渉、原本知実、境野飛鳥（以上、文化遺産国際協力センター）、二神葉子（企画情報部）

### 備 考

本研究は、文化庁より委託された。

## 装飾古墳の保存に関する調査研究事業

### 目 的

古墳壁画の保存活用に関する検討会に設けられた装飾古墳ワーキンググループにおいて、装飾古墳の保存活用の在り方やその方針を検討するに当たって必要となる技術的な調査を行う。

### 成 果

装飾古墳の保存状態は、古墳の特性や管理状況に応じて様々であり、装飾部分の劣化の態様も様々である。本事業において、将来にわたる装飾古墳の保存管理の在り方や保存活用の方針を検討するために必要となる情報を整理し、また必要に応じて現地調査を実施し、それらの調査結果をまとめて資料を提供した。なお、墳丘形状や土質の問題等、考古学的な性格の強い項目は奈良文化財研究所へ再委託を行った。

本受託研究では、特に「保存管理、保存活用」という観点から装飾古墳のおかれている全体像の把握を目指すことを目的とし、「外部空間に装飾があるもの」「内部空間に装飾があるもの」「本来の位置から移設された博物館環境下で保存されているもの」「埋戻しされたもの」とカテゴリーを分けて調査を進めた。また調査では、1. これまでの文献や資料等に基づく体系的な調査、2. 装飾古墳の今後の保存活用を考えるうえで重要と考えられる現場の調査、の2つを実施した。

#### 1. これまでの文献や資料等に基づく体系的な調査

古墳や装飾に関するこれまでの調査結果（公表された文献や資料）を整理し、装飾古墳の保存活用に関する情報の体系的な調査を行った。墳丘や石室など史跡整備報告書の図面等のデジタルデータ化を行うとともに、古墳環境に近い環境にある海外の遺跡について生物被害やその対策に関する情報収集を行った。

#### 2. 装飾古墳の今後の保存活用を考えるうえで重要と考えられる現場の調査

装飾古墳の保存整備に関する現地視察・聞き取り調査を、福岡県、熊本県、福島県、奈良県、大阪府、岡山県にて行った。特に福岡県内にある石人山古墳では、墳頂部に覆屋内展示されている石棺を対象に温湿度・照度の連続計測、石材水分量の調査や着生生物の分布調査、周辺部の三次元形状計測を実施し、装飾古墳の保存上の問題点の把握を行った。

### 発表

- ・岡田健「装飾古墳の保存に関する調査研究事業について」 第10回古墳壁画の保存活用に関する検討会 装飾古墳ワーキンググループ 三田共用会議所 14.1.31

### 研究組織

○岡田健、木川りか、犬塚将英、佐藤嘉則、朽津信明、森井順之（以上、保存修復科学センター）

### 備 考

本研究は、文化庁より委託された。

## 文化財（美術工芸品）等緊急保全活動・現況調査事業

### 目 的

2011（平成23）年3月に発生した東日本大震災を受け、被災文化財等の緊急保全活動が被災各地で行われた。その実情を把握し、今後予想される大災害等が発生した際の初動対応等の指針を関係機関・団体において策定するための情報を提供し、今後の関係機関・団体における文化財等救援活動の対応策の策定に資する。これにより、全国的な文化財等救援に係るネットワークの維持・発展を図る。

### 成 果

本事業の主な内容は、1. 東日本大震災を受けて実施された文化財（美術工芸品）等の緊急保全活動の実績のとりまとめ、2. 1の活動により緊急保全された文化財等の保管状況や修復状況の調査、3. 全国組織の文化財・美術等関係団体、地域の資料保全に関わる団体等の災害に対する対応策の現状調査、から成る。

#### 1. 文化庁による文化財レスキュー事業の2年間の活動で救援委員会が作成・集積した資料の整理・分析

今年度は活動日報（全914件）及び写真（26,933件）の情報整理を行った。活動日報については、対象となる施設、被災資料分類など項目を新たに設けることで、ある対象施設において必要な人員、時間、物資についてデータベースから分析可能となるようにした。また、写真ファイルにも位置情報などを付加することで、活動日報データベースと情報共有ができるようにした。また、村井源氏（東京工業大学）の協力を得て、活動日報データベースのビッグデータ解析に着手した。

3月18日、東北歴史博物館（宮城県多賀城市）で文化財レスキュー事業の記録に関するワークショップを開催し、上記解析作業の成果を発表し、救出活動における記録作成のあり方について意見交換を行った。宮城県被災文化財等保全連絡会議の参加団体のほか、岩手県、福島県教育委員会の担当者、岩手県立博物館からの参加も得た。

#### 2. 文化財レスキュー事業により緊急保全された文化財等の保管状況や修復状況に関する調査

今年度は福島県浜通りにおける救援活動が行われ、一時保管場所となる旧相馬女子高等学校における保存環境について指導助言を行った。また、宮城県石巻文化センター被災資料の一時保管施設となっている旧石巻市立湊第二小学校の保存環境、旧生出小学校の校舎・体育館を活用して被災資料の保存処置と保管を行っている岩手県陸前高田市博物館の状況に関する調査を実施した。

### 研究組織

○岡田健、佐野千絵、森井順之（以上、保存修復科学センター）、山梨絵美子、二神葉子、皿井舞（以上、企画情報部）、久保田裕道、菊池理予、今石みぎわ（以上、無形文化遺産部）江村知子（文化遺産国際協力センター）

### 備 考

本調査研究は、文化庁から委託された。平成25年度、26年度の2カ年間で実施される。

## 第38回世界遺産委員会における審議資産概要一覧表の作成

### 目 的

我が国の世界遺産政策を円滑に推進することを目的として、第38回世界遺産委員会で審議予定の物件についての一覧表を作成するとともに、新規資産として推薦される物件に関する事前の情報収集を行う。

### 成 果

2014（平成26）年6月15日～25日にカタール・ドーハで開催予定の第38回世界遺産委員会に関連した資料作成として、下記の項目を実施した。

#### 1. 世界遺産委員会での審議が予定されている物件の一覧の作成（2014（平成26）年2月～3月）

世界遺産センターのウェブサイトで公開されている会議文書について、第38回世界遺産委員会での議題7（保全状況の報告）での審議の対象とされている物件の一覧表を作成した。また、議題8（世界遺産一覧表への推薦）での審議の対象とされている全ての物件の名称の仮の和訳を作成し、一覧表とした。

#### 2. 推薦予定物件に係る資料の作成（同上）

1. で作成した議題8での審議予定物件の一覧表に基づいて、世界遺産センターで公開されている資料、その他信頼できる公的なウェブサイトを中心に資料を収集し、資産ごとにまとめた。

以上で作成した内容は、電子ファイルで電子メールにより文化庁に提出した。

### 研究組織

○川野邊渉、原本知実、境野飛鳥（以上、文化遺産国際協力センター）、二神葉子（企画情報部）

### 備 考

本研究は、文化庁より依頼された。



議題7で審議予定の「城壁都市バクー、シルヴァンジャー宮殿、及び乙女の塔」

受託研究

## 文化遺産保護国際貢献事業（ツバル・キリバス・フィジーの文化遺産保護に関する技術的調査）

### 目 的

本受託事業は、気候変動による海面上昇の影響を被る可能性の高い文化遺産を抱えたツバル、キリバス、フィジーの三か国において、文化遺産の現状と保護措置を明らかにし、当該分野における今後の日本の国際協力の在り方を検討するものである。

### 成 果

2014（平成26）年2月18日～3月2日にかけて、以下の項目に関し現地調査を実施した。

#### 1. ツバル

- ・フナフチ島およびフナファラ島（離島）における有形・無形文化遺産調査。
- ・政府閣僚（内務大臣・外務大臣等）からの文化遺産に関わる政策の聞き取り。
- ・南太平洋大学ツバルキャンパスにおいて研究者との文化遺産・環境に関する意見交換。
- ・文化遺産保護関連法についての情報収集。

#### 2. キリバス

- ・北タラワ州、およびアバイアン州における有形・無形文化遺産調査。
- ・内務大臣からの文化遺産に関わる政策の聞き取り。
- ・文化遺産保護関連法についての情報収集。

#### 3. フィジー

- ・南太平洋大学PACE-SD Officeにおいて、レオーネ氏ら研究者との文化遺産に関する意見交換。
- ・文化遺産保護関連法についての情報収集。

以上の結果を「業務結果説明書」にまとめた。

### 研究組織

○川野邊渉、境野飛鳥（以上、文化遺産国際協力センター）、久保田裕道（無形文化遺産部）、城野誠治（企画情報部）、石村智（奈良文化財研究所）、大西秀之（同志社女子大学）

### 備 考

本研究は、文化庁より委託された。



ファレカウプレ（伝統的集会所）における舞踊調査（ツバル）

## ユネスコ／日本信託基金 シルクロード世界遺産登録に向けた支援事業

### 目 的

現在、中央アジア5カ国と中国が、シルクロード関連遺跡の世界遺産一括登録を目指し、国境の枠を超え、様々な活動を行っている。この活動を支援するため、文化遺産国際協力センターは、2011（平成23）年度より、ユネスコ日本文化遺産保存信託基金「シルクロード世界遺産登録に向けた支援事業」(UNESCO/Japanese Funds-in-Trust Project “Support for documentation standards and procedures of the Silk Roads World Heritage Serial and Transnational Nomination in Central Asia”)に参加し、中央アジア各国で様々な事業を行っている。今年度はタジキスタン共和国とウズベキスタン共和国において、考古遺跡のドキュメンテーションにかかる技術移転と人材育成を目的としたワークショップを開催した。

### 成 果

#### 1. 遺跡の測量に関するワークショップ（タジキスタン共和国）

タジキスタン共和国では、2013（平成25）年11月7日から14日まで、遺跡の測量に関する2回目のワークショップを開催した。木口、久米、山田、山藤を講師とし、タジキスタン文化省及びフルブック博物館と共同で実施したこのワークショップには、タジキスタンの若手研究者9名が参加した。参加者は約1週間にわたる集中講義・実習を経て、ドキュメンテーションのための測量計画と実施、その分析に関わる専門的プロセスを学習し、また、本事業に伴って寄贈された測量機材やGPS機材などの使い方を習得した。

#### 2. 文化遺産の写真測量に関するワークショップ（ウズベキスタン共和国）

ウズベキスタン共和国では、2013（平成25）年12月1日から3日まで、文化遺産の写真測量に関するワークショップを開催した。山内、森本、木口、安倍、間舎を講師とし、14名のウズベキスタン人若手専門家が参加した。

#### 3. 国際会議「Sub-regional closing meeting of UNESCO/Japan Funds-in-Trust project: Support for documentation standards and procedures of the Silk Roads World Heritage Serial Transnational Nomination in Central Asia」

2013（平成25）年12月4日～5日にタシケントで開催された「シルクロード世界遺産登録に向けた支援事業の最終会議」に山内、森本、安倍が参加した。この会議では、東京文化財研究所やロンドン大学が中央アジア各国で実施してきた人材育成事業のレビューを行った。

### 研究組織

○山内和也、安倍雅史、久米正吾、山田大樹（以上、文化遺産国際協力センター）、山藤正敏、間舎裕生（以上、客員研究員）、森本晋（奈良文化財研究所）、木口裕史（株式会社パスコ）

### 備 考

本研究は、ユネスコ・アルマティ事務所及びタシケント事務所より依頼された。



受託研究

## ユネスコ／日本信託基金 バーミヤーン遺跡保存事業

### 研究組織

○山内和也、安倍雅史、久米正吾、山田大樹（以上、文化遺産国際協力センター）、谷口陽子、鈴木環（以上、客員研究員）、前田耕作（和光大学名誉教授）、ファビオ・コロombo（保存修復専門家）、岡崎甚幸（武庫川女子大学教授）、森本晋、石村智、田代亜紀子（以上、奈良文化財研究所）

### 備 考

本研究は、ユネスコ・世界遺産センターより依頼された。

## ユネスコ／日本信託基金 タンロン・ハノイ文化遺産群の保存事業

### 目 的

本事業は、ベトナム・ハノイのタンロン皇城遺跡について、今後の恒久的な保存管理が万全に行われるよう、包括的に支援することを目的とする。遺跡価値の評価に関する歴史、考古、社会学的研究や、出土遺構や遺物の適切な保存手法の提示、さらには保存管理計画の策定支援等をベトナム側関係機関・専門家と協調しながら行うことを通じて、ベトナム側の保存管理体制構築に寄与することを目指した。このため、全ての事業項目において、技術移転や人材育成に重点を置いて実施した。

### 成 果

事業の最終第4年度である今年度は、以下のような活動を実施した。

1. GIS研修ワークショップ（2013（平成25）年5月15日から18日まで、9月10日）  
現地担当スタッフを対象に、本遺跡管理のためのGIS（地理情報システム）構築に向けた実習を日越講師により行った。
2. 植民地期建造物群実測調査（2013（平成25）年5月20日から24日まで）  
本遺跡内所在フランス植民地期軍事関係建物を越側と共同調査し、以前の調査成果とあわせてCADによる図化作業を行って、初の正確な現状記録となる実測図集にまとめた。今後の遺産管理の基礎資料としての活用が期待される。
3. 遺構保存調査（2013（平成25）年8月8日から9日まで）  
遺構が存在する土中の水分移動に関する計測データを回収し、保存処理した煉瓦の暴露試験体も結果分析のため回収した。併せて、機材の扱い方やデータ分析の方法等についての越側への講習も行った。
4. 成果報告シンポジウムの開催（2013（平成25）年9月11日から12日まで）  
事業の各分野を担当した両国の専門家と関係者、約60名が参加し、9本の発表による活動成果の総括と今後の課題等に関する意見交換を行った。日越友好年記念行事の一つでもある本シンポを通じて、本遺跡の重要性を再確認するとともに、適切な保存措置に関する研究や、遺産管理のための計画づくり、保存管理体制の整備に向けた技術移転・人材育成など、多岐にわたる本事業の成果が共有された。

上記成果報告ワークショップでの発表内容を含む事業実施経緯及び成果の概要は、『ユネスコ日本信託基金事業「タンロン・ハノイ文化遺産群の保存」成果報告書』として、越語、日本語、英語の3言語版で刊行した。また、遺跡内所在のフランス植民地建造物については、実測調査の成果をもとに作成した現状図を収録した図面集『Architectural Drawings of the Buildings from French Colonial Period in the World Heritage Site “Central Sector of the Imperial Citadel of Thang Long – Hanoi”』を英語版で刊行した。

### 研究組織

○友田正彦、佐藤桂（以上、文化遺産国際協力センター）、亀井伸雄（所長）、石崎武志（副所長）、杉山洋、高妻洋成、脇谷草一郎（以上、奈良文化財研究所）、井上和人（明治大学）、青木繁夫（サイバー大学）、桃木至朗（大阪大学）、八尾隆生（広島大学）、坪井善明（早稲田大学）、上野邦一（奈良女子大学）、柴山守、清野陽一（以上、京都大学）、川島武洋（(株)エクシード）

### 備 考

本研究は、ユネスコ・ハノイ事務所より依頼された。

## 受託研究

# エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズⅡ）にかかる国内支援業務

## 目 的

JICAから受託した「エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズⅡ）にかかる国内支援業務」を実施する。国内外の文化財保護に携わる専門家と連携しながら、プロジェクトに対する助言、保存修復に関する技術的情報の提供や提案、技術移転実施計画の作成、専門家派遣や研修受入支援など国内支援業務を行う。

## 成 果

1. 以下11件の研修について、支援及び調整業務を行った。（ ）内は実施場所、実施期間、参加者数。
  - 「第2回染織品研修」（エジプト、2013（平成25）年4月14日～23日、16名）
  - 「第3回労働安全衛生研修」（エジプト、2013（平成25）年4月28日～5月5日、19名）
  - 「文化財の診断技術・分析法研修」（エジプト、2013（平成25）年5月8日～14日、10名）
  - 「第6回所内移動・梱包研修」（エジプト、2013（平成25）年6月13日～27日、35名）
  - 「第4回収蔵品管理研修」（日本、2013（平成25）年6月17日～28日、6名）
  - 「第3回染織品研修」（日本、2013（平成25）年9月2日～13日、8名）
  - 「国外視察研修（含むBUMA8奈良大会）」（日本、2013（平成25）年9月4日～19日、3名）
  - 「第3回微生物管理研修」（日本、2014（平成26）年1月14日～2月14日、3名）
  - 「第7回所内移動・梱包研修」（エジプト、2014（平成26）年2月9日～24日、23名）
  - 「木材研修」（日本、2014（平成26）年2月12日～20日、7名）
  - 「第2回彩色文化財研修」（エジプト、2014（平成26）年2月20日～27日、16名）
2. 上記研修の担当専門家候補をJICAに推薦し、専門家派遣支援と日本での研修受入れの調整を行った。
3. 教材・資機材などのアドバイス、教材・資料作成支援、翻訳、語彙集の作成などの支援を行った。
4. 国内支援委員会の開催協力として、技術的情報の整理および資料作成を行った。
5. 研修計画策定会議（専門家全体会議）（2回）を開催した。
6. 『大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズⅡ）業務実施報告書』上半期分及び下半期分を作成した。
7. 「保存修復人材育成プログラム（案）」を改訂し、「大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト（フェーズⅡ）26年度研修計画（案）」を作成した。

## 研究組織

○山内和也、藤澤明、川口雄嗣、田島さか恵、本郷浩志（以上、文化遺産国際協力センター）、松田泰典（大エジプト博物館保存修復センタープロジェクトJICA専門家テクニカルチーフアドバイザー）、島津美子（国立歴史民俗博物館）

## 備 考

本研究は、独立行政法人国際協力機構（JICA）より依頼された。

## 小石川後樂園得仁堂収蔵物の保存修復科学的な調査研究

### 目 的

対象資料は、小石川後樂園に所在する得仁堂内に長年収蔵されていた螺鈿机1点である。得仁堂は1668（寛文8）年に水戸藩主徳川光圀によって建立された東京都指定文化財であり、この螺鈿机は天板のみならず脚部や側板にも緻密な草木花蝶の文様が螺鈿漆塗りで加飾されていたことが、漆塗膜や螺鈿貝の残存痕跡から理解される。ところが長年堂内に放置されたままであったため、全体的に埃塵に覆われるとともに、脚部等の破損が激しく天板・側板・脚部は分割された状態であった。また、漆塗膜層や螺鈿貝の剥落などの劣化も著しいため、早急の保存措置が必要であった。そこで平成25年度から26年度の2カ年の継続事業として、①本対象資料である螺鈿机の性格を把握するための基礎的な調査（螺鈿模様の復元図作成、塗装材料及び技法・構造の分析調査など）、②塗装面の保存修復作業、③破損や欠損が著しい脚部の復元、などの一連の作業を行うこととなった。このうちの本年は、主に①に関する観察・分析調査と、それに伴うクリーニング作業及び劣化が著しい箇所での養生作業を実施した。

### 成 果

1. 搬入および低酸素くん蒸作業：搬入された対象資料は得仁堂内で長年放置されていたため、虫害痕跡が目視確認された。そのため、搬入時に脱酸素剤と専用袋を用いたくん蒸作業を約3カ月実施した。
2. 調査前の写真撮影：くん蒸作業が終了した後、写場に移し、高精細デジタル写真撮影を実施した。
3. クリーニングおよび脆弱膜面の養生作業：以後の調査を実施する際の移動時に脆弱箇所から漆塗料および螺鈿貝の小剥落片が出ないように和紙としょうぶ糊による養生作業と、資料表面に堆積した埃塵を刷毛・筆、ミュージアムクリーナー等を用いて簡易クリーニングを実施した。
4. 塗装材料及び技法に関する分析調査：剥落小塗膜試料を採取し、塗装断面の顕微鏡観察、漆塗料のPY-GC/MS分析等を実施した。螺鈿加飾は木部を文様のデザインに合わせて掘り込んだ溝の中に1mm厚程度の鮑貝を嵌め込み、鮑貝の螺鈿パーツの裏側には黒い接着材料の付着が確認されており、溝状に掘り込んだ木部にこの接着材料で螺鈿の貝殻を貼り付け、サビ泥状の下地を施し、黒漆を2～3層上塗りしていることが塗装構造の断面観察で確認された。黒漆の下層には必要箇所、一部藍染料の痕跡も確認される粗い織の布繊維で布着せ補強されていた。またごく一部の箇所ではあるが、黒漆の上に微量の金箔が確認された。
5. 螺鈿模様や復元図作成：高精細デジタル写真画像と目視観察により、対象資料の螺鈿模様の復元図を作成し、現状で残存している箇所と復元箇所の比較が可能ないように色分けした線描の図面を作成した。

### 研究組織

○北野信彦、桐原瑛奈（以上、保存修復科学センター）、山下好彦（文化遺産国際協力センター）、西山陽（修復家）

### 備 考

本研究は、東京都（東京都東部公園緑地事務所）より委託された。

受託研究

## 水浸した日本画の修復方法に関する調査研究

### 目 的

東日本大震災において水浸した日本画について、再現実験や劣化の分析を行い、処置方法の検討を行う。

### 成 果

東日本大震災において水浸した日本画について、再現実験や劣化の分析を行い、処置方法の検討を行った。本年度は対象作品である両界曼荼羅について、具体的な作業内容の検討を行なった。

昨年度には、旧総裏紙を接着している接着剤を分析し、ポリエチレン-酢酸ビニルの共重合体であることを確認している。この材料はシクロヘキサンを使用することで剥離可能なことも確認できている。

昨年度に引き続き、総裏を除去した場合に残る肌裏紙について検討した。

この肌裏紙は旧修理時には打ち替えていないため、劣化した澱粉糊と思われる接着剤により辛うじて接着されている現状であることが確認された。この肌裏紙を除去するか否か、また除去する方法について本年度、調査を行いつつ検討した。

その結果、肌裏紙を除去した上で、本紙の本格修理を行うことを決定し、それに則った形で作業を進行した。

具体的な作業としては、顔料の剥落どめを行なった後に水によるクリーニングをした上で、肌裏紙の除去を行なった。

### 研究組織

○早川典子、早川泰弘、朽津信明、森井順之（以上、保存修復科学センター）、山田祐子、楠京子（以上、文化遺産国際協力センター）

### 備 考

本研究は、鹿嶋市龍蔵院より依頼された。



シクロヘキサンを使用した接着剤の除去

受託研究

## 絵金屏風の保存修理に関する調査研究

### 目 的

本研究は、燻蒸時の事故により顔料の変色など作品の劣化が生じた絵金屏風の保存修理に関する調査研究である。

### 成 果

対象作品は、赤岡絵金屏風保存会所蔵の下記作品である。

高知県指定文化財（美術工芸品・絵画）紙本著色 絵金屏風 二曲一隻 5点

- ・「勢州阿漕浦 平次住家」
- ・「蘆屋道満大内鑑 葛の葉子別れ」
- ・「鎌倉三代記 三浦別れ」
- ・「八百屋お七歌祭文 吉祥寺」
- ・「蝶花形名歌島台 小坂部館」

搬入された作品に関して、現状を把握し経時変化を確認するために高精細画像の撮影を行った。

また、変色の再現実験を行った。本紙と同様の竹紙を用い、その上に本紙で使用されたのと同様の顔料を塗布後、本紙に行われたと同様の燻蒸を行うことで、劣化状況を追試した。

その結果、緑色の顔料の変色が再現され、また、これらの変色顔料上のpHが著しく低いことも確認された。

これらを踏まえて、作品の修理保存方法を検討する予定である。

### 研究組織

○岡田健、朽津信明、早川泰弘、早川典子（以上、保存修復科学センター）、川野邊渉（文化遺産国際協力センター）、城野誠治（企画情報部）

### 備 考

当研究は、熊本市美術文化振興財団より依頼された。

受託研究

## 関西大学博物館および考古学研究室保管 奈良県高市郡明日香村牽牛子塚古墳出土夾紵棺一括の修理

### 目 的

本修理を行った資料は、終末期古墳（7世紀）である奈良県高市郡明日香村牽牛子塚古墳から出土した夾紵棺（漆製の棺）の破片である。関西大学が保管している大正の発掘品破片7点と考古学研究室に保管されている1977（昭和52）年に明日香村が古墳の保存環境整備に伴う発掘で出土した破片一括である。

本資料は1977（昭和52）年に発掘後、漆膜の剥落や亀裂、損傷などを防止するためかなり厚く樹脂が塗布されているので表面観察が難しく、調査研究の妨げとなってしまったため以後進展していない。また表面の光沢が著しく展示などの資料公開も一部に限られていた。さらにこの樹脂が夏などの高温期に特に軟化し、粘着性を持ち、保護紙と付着し、これを剥がそうとすると、かえって漆膜ごと剥がれてしまうなどの損傷を与えていた。また樹脂の塗布後30年以上経過し樹脂の劣化が原因と思われる臭いがするなど、明らかに樹脂の経年劣化がみうけられた。

今回の修理では資料の観察を妨げている劣化した樹脂を出来るだけ除去し、資料の調査研究が出来るような状態にした。尚かつ安全な今後の保管のため脆弱部分については強化処置を行なった。

### 成 果

修復対象

夾紵棺破片一括

修復概要

1. 過去の保存処理で使用された強化処理剤の除去：劣化した強化処理剤を有機溶剤（エチルアルコール）で溶かして除去した。
2. 土などの汚れの除去：表面の汚れは蒸留水と有機溶剤（エチルアルコール）を少量筆に含ませ除去した。
3. 強化処理：劣化して脆弱になった破片をアクリル樹脂エマルジョンで強化した。
4. 漆膜の剥落留め：漆膜の接合はアクリル樹脂で点接合した。
5. 接合：アクリル樹脂を使用して破片を接合した。

効果と課題

以上の修理、とりわけクリーニング作業を実施した結果、これまで他の機関が少数の資料を調査した断片的な結果しか知られていなかった本資料群の塗装技術の実態を、ほぼ網羅的に明らかにすることができた。今後は、本資料群をどのような資料活用元とするのが課題である。

研究組織

○北野信彦（保存修復科学センター）、犬竹和（大正大学）

備 考

本研究は、学校法人関西大学より依頼された。

## 松平定信《細写物語歌書『源氏物語』》の収蔵箱の保存に関する調査研究

### 目 的

収蔵箱の装飾技法と構造に関する調査およびその修復処置に関する技法的な研究などを実施する。

### 成 果

収蔵箱は背面に蝶番を打ち、観音開きになる形式で、内部に棚を設ける。棚の上には歌書を引き出すための引手のついた台をそれぞれの段に置く。棚の表面に格子状の枠を設けて紗を貼り、周囲に金紙を廻す。正面には裏側に裏箔した鼈甲を貼り、月型の彫金を取り付ける。素地は鉄刀木製の指物造りで、さくらの花を木地蒔絵する。正面には留金具、天板には提金具、箱の角に隅金具を打つ。

修理前の状態は、以下のとおりであった。木地の収縮により木地接合部が外れ段差ができていた。また、木地表面に数か所亀裂があり、大きいところでは幅2～3ミリ程度の割れが認められた。鼈甲は著しく剥離し、彫金も一部で外れていた。蝶番部分には後世修理と考えられる釘が打たれ、鼈甲は合成樹脂で接着されていると考えられた。棚の前面の銀糸を織り込んだ紫絹紗を張った内扉については、片側の絹紗（A）は一部裂けているが残っているものの、もう片方の絹紗（B）は棧にわずかに糸を残すのみでほとんど失われていた。

修復方針としては、木工、漆工部分は現状維持修理を基本とするが、展示効果を考えて木地割れや亀裂部分は充填後に色調整を行った。また蝶番取り外しの際に、後世修理の釘等で損傷などの問題が生じた箇所について、釘を復元した。鼈甲は木地の収縮から不安定な状態になっていたため、後世修理の接着材料を溶剤で除去していったん取り外した。その結果、鼈甲の裏側に金箔は確認できなかったが、鼈甲下の木地部分に「吉」「上」の墨書が見つかった。

染織部については、絹紗Aの欠損が広がらないように、糸の序列に従って並べ直し、補強紗に縫い付け補修した。絹紗Bは蒔絵箱を開いて展示するには見栄えが悪く、現状では残糸がさらに失われる可能性が高いため絹紗Aに類似した紗を復元し、残糸をそこに補強したうえで張り込み、刺繍を加えた。見た目は復元されるが、技法と素材を変えることで後補であることが分かる方法で復元した。

### 研究組織

○佐野千絵（保存修復科学センター）、山下好彦（文化遺産国際協力センター）、石井美恵（客員研究員）

### 備 考

本調査研究は、桑名市博物館より依頼された。



## ラチャプラディット寺院の螺鈿扉修復計画策定のための調査研究

### 目 的

タイ・バンコクに所在するラチャプラディット寺院 (Wat Ratchapradit) は一級王室仏教寺院のひとつで、1864年にラーマ4世の発願により建立されたとされる。寺院の拝殿には、窓及び出入口の扉の建物内側に面した部分に、黒漆螺鈿と漆絵による装飾が施されており、特に螺鈿はその文様と用いられている貝の特徴、文書記録から、日本での製作の可能性がある。この螺鈿の装飾を有する扉について、材料や技法についての調査研究及び試験的な修理を行うことによって、本格的な修理の計画を策定することを目的としている。

### 成 果

ラチャプラディット寺院の螺鈿の装飾を有する扉については、2011（平成23）年6月と2012（平成24）年8月にタイ文化省芸術局の依頼により東京文化財研究所が予備調査を行った。その後、芸術局からの改めでの修理に関する協力要請に対し、日本での調査、専門家の研修を含む、タイ側の機関を実施主体とする5年間の修理計画を立案したところ、2013（平成25）年5月はバンコク、6月には東京で実施したタイ側関係機関及び東京文化財研究所での協議を経て、所有者であるラチャプラディット寺院からの受託研究という形式で、扉の螺鈿及び漆絵の部材各1点を日本に持ち込み、試験的な修理を含む修理計画策定のための調査を行うこととなった。

平成25年度は、以下の項目を実施した。

#### 1. 扉部材の受け入れ

10月7日にラチャプラディット寺院と文化省芸術局の関係者が上記扉部材各1点の合計2点を持参、同日、東京文化財研究所に部材を受け入れた。通関手続の後、部材は10月11日に脱酸素剤とともに密封する脱酸素薫蒸を開始、収蔵庫に安置した。3カ月の薫蒸期間を経て、1月16日に漆アトリエに移動し、脱酸素薫蒸を終了、開封した。

#### 2. 調査・修理前写真撮影

調査及び試験的な修理に先立ち、1月30日に部材の写真撮影を行った。扉部材全体の画像、特に傷んでいる部分に着目しての部分画像を可視光（落射光と斜光線）、及び紫外線、短波長の光で撮影した。

#### 3. 分析のための試料採取

用いられている材料、後の修理で用いられた材料の種類、製作技法、材料の産地に関する情報を得ることを目的として、漆膜、下地、木材及び下張りに用いられている紙に関する分析のための試料を2月24日に採取し、分析に供した。

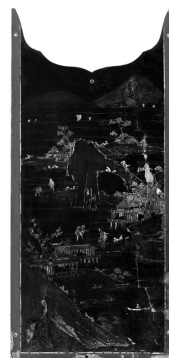
### 研究組織

○川野邊渉、山下好彦（以上、文化遺産国際協力センター）、二神葉子（企画情報部）

### 備 考

本研究は、ラチャプラディット寺院より依頼された。

現在東京文化財研究所での調査を行っている螺鈿装飾を有する扉の部材



# 京都市内（平安京跡）出土文化財の保存修復科学的な調査研究

## 目 的

京都市は1200年以上の歴史があるものの、歴史資料の多くは度重なる被災により失われている。その一方で京都市内の発掘調査では、オリジナルの状態でも貴重な歴史資料が多数出土している。これらに対する保存対策や、個々の資料がもつ歴史的情報を引き出すための保存修復科学的な調査研究を行うことは、文化財からみたそれぞれの時代に特徴的な歴史のもしくは伝統的な材料の調達や加工・製作技術のあり方を理解する上でも、貴重な文化財を後世に残す上でも重要なことである。さらには、国指定文化財などに代表される伝世資料群の性格や取り扱い方法を考える上でも示唆的な内容を多く含んでいる。そのため、京都市内では最も考古学的調査で実績がある京都市埋蔵文化財研究所と協力して京都市内出土文化財に関する保存修復科学的な調査研究を行うとともに、発掘担当者にそのつど適切な指導助言を行い、現状に即した歴史的な出土文化財の取り扱い方法の確立を目指すことを主目的とする。

## 成 果

本年度は、1. 平安京左京三条四坊十町（柳池中学構内遺跡）出土漆器未製品の分析と保存修理、2. 西京極遺跡出土小型鏡の分析と保存修理指導、3. 相国寺境内遺跡（同志社構内）出土漆器の分析と保存修理指導、などを行った。成果として、以下のような内容を得た。

1. 平安京左京三条四坊十町（柳池中学構内遺跡）から出土した漆器資料のうち、製品及び未製品であった5点のPY-GC/MS分析を行ったところ、4点の塗膜層からタイ・カンボジア・ミャンマー産漆に特徴的なチチオール成分と日本・中国産漆に特徴的なウルシオール成分の両方が検出された。このことから、日本国内の出土漆器に東南アジア産漆が使用されていたことが初めて確認された。
2. 西京極遺跡出土鏡はX線透過写真観察から、文様が省略された素文の小型鏡であることがわかった。本資料が出土した西京極遺跡から比較的近い広隆寺旧境内に所在する常盤仲ノ町遺跡・東ノ町古墳群からも7～8世紀代の小型鏡が1面出土している。双方の蛍光X線分析を行ったところ、小常盤仲ノ町遺跡・東ノ町古墳群からすでに出土した小型海獣葡萄鏡は、微量のアンチモンが含まれていた。一方、これらよりはやや年代的に下る奈良時代から平安時代前期頃の本資料には微量の砒素（As）が検出された。前者は飛鳥池出土品を代表とする飛鳥時代の青銅器の特徴、後者はそれよりやや年代が下る奈良末～平安時代ころの長門国長登銅山から調達された銅鉱石を原材料とする青銅器の特徴を表しており、発掘調査時の年代観とも一致した。
3. 相国寺境内遺跡（同志社構内）出土の石臼に塗装された個体番号Aは細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）、その他はいずれも炭粉を柿渋や膠、糊などに混ぜて用いる炭粉下地であると理解した。そして挽き物類は、いずれも炭粉下地であり、黒漆は比較的薄く黒漆層や透明感のある赤褐色系漆を1層、朱漆は薄い中塗りの黒漆の上に上塗りの朱漆を塗布した2層塗りであった。このような技法は、中世後期から近世初頭期における実用的な出土漆器椀類に一般的にみられる特徴である。なお、朱色漆を加飾する漆絵はいずれも地の黒漆の上に描かれていた。

## 研究組織

○北野信彦、吉田直人（以上、保存修復科学センター）、辻純一、竜子正彦（以上、財団法人京都市埋蔵文化財研究所）

## 航空資料保存の研究

### 目 的

紙や写真を主体とする航空に関する資料は、活用に重点がおかれてきたこともあり保存状態が悪いものが多く、このままでは貴重な資料の散逸を免れない状況にある。したがって、原資料を損なわずに今後も有効に活用するために、昨年引き続き資料の種類や劣化の状態を調査し保存方法・修復方法の開発を行った

### 成 果

#### 膨大な個人資料の記録・保存

昨年度に寄贈頂いた以下の資料に関して整理、記録、デジタル化、保存処置を実施した。

1. 旧文部省奉職時に従事したグライダーの開発に携わった山崎好雄氏が遺した、日本で開発／設計された各種グライダーの図面や文献等一式。山崎氏は、日本で開発／設計されたグライダーの第一人者であり、開発段階からの各種資料がきちんと残されており、日本におけるグライダーの歴史を知る上で非常に貴重な紙資料群である。今年度は整理、選別、保存処置を行った。
2. さらに、山崎氏からの寄贈品に含まれていた、日本で最初に飛行したグライダー（若本号）の水平尾翼及び主翼の昇降舵につき、科学博物館にて展示を行うために修復及び保存措置を施した。

これらの資料のうち、1. については、選別終了後は保存環境の改善を図り、さらに長く保存する処置をとるとともに、デジタル化を行い、貴重な資料として公開するべく、日本航空協会とも相談の上、今後も作業を行う。

また、2. については、保存、修復措置が終了したので、今後は適切に保管を行っていく。

### 研究組織

○中山俊介（保存修復科学センター）、長島宏行（日本航空協会）



グライダー水平尾翼の修復に関する調査

# 伝山内盛豊所用当世具足の文化財科学的調査

## 目 的

現在、一宮市博物館では常設展示リニューアルに向けた調査研究が行われている。本研究では「伝 山内盛豊所用」として一宮市(旧木曾川町)に伝来していた「仁王胴具足」について、伝来の経過及び具足制作年代の解明を含め、当地域に本仁王胴具足が伝来した歴史を明らかにするための総合調査を共同研究として実施した。一連の調査成果は、成果報告書を作成して博物館の刊行図書として出版すること。成果報告をテーマ別に分けた一般向けの連続の公開講座を開催すること、リニューアルオープン後の博物館の常設展示の目玉とすること、成果報告書を基に指定物件の登録を目指すこと、などを目的とする。そのため本研究では、①X線透過写真撮影による構造調査、②塗装材料及び技法に関する分析調査、③布繊維の構造及び染色材料の分析調査、④具足の形態及び歴史的特徴の検討、などに分けた総合調査を実施した。

## 成 果

1. 一宮市博物館保管の仁王胴具足の塗装技術を調査した結果、兜前部、仁王胴具足の前・背胴部、籠手、臍当には男性の半裸体を表現する淡い肉肌色の塗料が上塗りされているとともに、背胴の待受や合当理部には蒔絵加飾されていた。このうちの最大の特徴である淡い肉肌色の上塗り塗料は、肉肌色の色相を獲得するために、鉛白顔料と朱顔料をあわせて色材をつくり、これを乾性油系塗料に入れる油画技法が用いられていた。また、二枚胴の上端部を玉縁状に調整して金蒔絵を施すとともに、待受部には、桃山文化期における典型的な五七桐紋が、朱漆の上に金粉(Au)を蒔きつける平蒔絵技法(針描・描割を含む)で加飾されていた。この五七桐蒔絵の類例は、都久夫須麻神社本殿内陣部材、大坂城三の丸跡などの慶長期の年代観がわかる資料群であるため、本具足の製作年代を考える上でも参考となった。
2. この具足の籠手内面には残存状態は良好ではないものの、兵庫鎖に縫い付けられたオリジナルと想定される絹緞子裂が貼られていた。調査の結果、この裂には大航海時代のイタリアやスペインなどで製織された柘榴文様と類似した刺繍デザインがあるものの、製織地自体は中国製であると推定している。これと文様構成が極めて良く似た裂は、「菊桐紋卍字繫ぎに牡丹文様胴服 豊臣秀吉所用」(重要文化財・豊国神社蔵)の襟にもみられる。
3. 仁王胴具足の代表例は、ルイス・フロイスが著書『日本史』のなかで、1592(天正20)年7月25日の記録として豊臣秀吉がインド副王に贈呈し、その後スペインに渡り、現在、マドリッド王宮武器庫博物館に所蔵されている具足があるが、金具の装飾や構造が本資料と類似していることがわかった。マドリッド王宮武器庫博物館所蔵の仁王胴具足は1884年に焼失したため、現在は残欠品として保管されている。そのため、上塗り塗装は損失しており当時の状況は不明であるが、その一方で、本具足の塗装の残存状態は決して良好ではないが、今回の調査の結果、後世の塗り直し補修の痕跡が無くオリジナルをよく残していることが確認された。これらの点から、一宮市博物館保管の仁王胴具足は、甲冑文化財としての価値は高いものと評価された。

## 研究組織

○北野信彦、犬塚将英、桐原瑛奈(以上、保存修復科学センター)、神田年浩(一宮市博物館)、池田宏(東京国立博物館)、山川暁(京都国立博物館)、佐々木良子(京都工芸繊維大学)

# 鎌倉市内（大倉幕府周辺遺跡群）出土資料の保存修復科学的な調査研究

## 目 的

鎌倉市は鎌倉幕府開幕後800年以上の歴史があるものの、歴史資料の多くは度重なる被災により失われている。その一方で鎌倉市内の発掘調査では、オリジナルの状態でご貴重な歴史資料が多数出土している。これらに対する保存対策や、個々の資料がもつ歴史的情報を引き出すための保存修復科学的な調査研究を行うことは、文化財からみたそれぞれの時代に特徴的な歴史のもしくは伝統的な材料の調達や加工・製作技術のあり方を理解する上でも、貴重な文化財を後世に残す上でも重要なことである。当研究所では、すでに同様の歴史考古学分野の考古資料を多数有する京都市内出土文化財に関する保存修復科学的な共同研究を京都市埋蔵文化財研究所と進めており、実績も積みつつある。近年になって鎌倉市内では鎌倉幕府関連施設が所在したとされる大倉幕府周辺遺跡の発掘調査を鎌倉市教育委員会が主体となって進めており、多数の重要な資料（金属製品・木製品）が出土している。このことを考慮に入れて、本年度は鎌倉市と協力してこの遺跡出土資料に関する保存修復科学的な調査研究を実施するとともに、調査担当者にその都度適切な指導助言を行い、京都同様、鎌倉の現状に即した歴史的な出土資料の取り扱い方法の確立を目指すことを主目的とする。

## 成 果

本年度は、1.平成24年度に引き続き大倉幕府周辺遺跡から出土した鎖帷子（漆塗籠手）の材質分析と保存修復実験、2.鎌倉市内の扇ヶ谷周辺遺跡から出土した中世の漆器資料群の調査と保存修復指導、などを行った。

1. 大倉幕府周辺遺跡の井戸底部からは、ほぼ完形の漆塗籠手が一点出土している。平成23年度末には同じ鎌倉市内の下馬周辺遺跡の建物床下掘穴から大鎧が出土しており、これまでの調査では2領分の鎧一括であることが確認されているが、そこには漆塗籠手は含まれていなかった。両者とも、社寺に奉納された伝世大鎧とは異なる実用性が高い出土文化財である。そのため、これらの保存修復科学的な分析及び構造調査、その成果を踏まえた保存処理方法を行うことは、中世期鎧の実態を研究する上でも重要である。いずれも鉄地に黒漆が塗装されているが、現状は水漬け保管された状態であった。本年度は脱塩処理実験を実施するとともに、X線透過写真撮影による構造調査、黒漆塗膜破片のPY-GC/MS分析を行った。その結果、この黒漆は乾性油成分を含まないウルシオール成分のみが検出され、下地を施さずに鉄地に直接塗装されているため焼き付け漆の可能性が想定された。この漆塗膜は断面観察の結果、4層の多層塗り構造であるが明らかになった。この資料の保存修復科学的な実験調査は、①鉄に含まれる塩化物イオンの除去、②クリーニングと防錆処理、③漆膜の剥落止め、④漆膜のためのゆっくりとした乾燥と乾燥中の鉄の錆化を防止、⑤強化処理と漆膜の剥落止め、⑥支持展示台の検討（文化財仕様の桐台の作成）、の順に従って行い、無事終了させた。詳細は、調査成果報告書に述べている。
2. 今年度の鎌倉市内の扇ヶ谷周辺遺跡の発掘調査では、大倉幕府周辺遺跡と類似した生活什器である椀・皿などの漆器資料が大量に出土した。これらの現地調査を行い、各資料の目視観察を行ったところ、室町期頃の極めて保存状態は良好であるとともに、加飾の色漆絵などは他とは異なる珍しいデザインや技法の漆器資料が多数含まれている一括資料群であることがわかった。この時期のまとまった漆器資料群は希少であるため、来年度以降を目標にした調査方法と保存修復を実施するための保管方法の指導を行った。

## 研究組織

○北野信彦（保存修復科学センター）、鈴木庸一郎、永田史子、米澤雅美（以上、鎌倉市）

# イスラーム時代のフルブック都城址出土の壁画断片の保存修復

## 目 的

タジキスタン国立古代博物館（以下、古代博物館）では、国内の各遺跡から出土した壁画断片を所蔵している。旧ソ連邦時代に行われた大規模な発掘調査によって発見されたこれらの壁画の多くは、すでにロシアのエルミタージュ博物館および古代博物館等に展示されている一部を除き、適切な処置がなされないまま、古代博物館の収蔵庫に保管されている。本事業において、保存修復の対象となった壁画断片は、タジキスタンの南東部に位置するフルブック遺跡から出土し、古代博物館の収蔵庫に30年余り保管されていた。フルブック遺跡は9～13世紀の都城址であり、壁画の製作年代は11～12世紀と推定されている。同時期の壁画の出土事例は限られており学術資料として重要である。他方、断片の状態がきわめて脆弱であるため、これらの壁画資料を対象に保存修復処置を行い、壁画断片の保存修復方法の向上および将来的な古代博物館での展示を目指す。

## 成 果

住友財団による助成を受け、東京文化財研究所において保存修復材料および適切な手法の選択のための実験を実施し、そののち、保存修復専門家を古代博物館に派遣した。現地では、これまでに実施している保存修復処置を継続するとともに、事前の実験結果を反映させた保存修復処置を試みた。

平成24年度までに、彩色表面の強化、細かく割れた小断片の接合、裏打ちなどの処置を実施した。今年度は、2013（平成25）年9月18日～10月15日まで現地にミッションを派遣し、よりいっそうの断片の構造的な安定化を目指し、壁画断片の背面に土壁を模した擬似土を接着した。擬似土は、現地の土（レス土）に発泡ガラス材、スサ、アラビアガムなどを混合したものである。また、この処置によりこれまで不均一であった断片の厚さをほぼ一定にすることができ、表面の高さを合わせることも可能になった。さらに、断片の欠損箇所や接合箇所には石膏にガラスマイクロバルーンを混合した接合材を用いて充填を行った。全体のバランスを見ながら充填箇所の色合わせを行うことにより、画像が明確になった。今後は、タジキスタン国立古代博物館において安全に展示する方法を検討する予定である

## 研究組織

○山内和也、藤澤明（以上、文化遺産国際協力センター）、杉原朱美（客員研究員）、島津美子（国立歴史民俗博物館）、増田久美（増田絵画修復工房）

## 備 考

当研究は、財団法人住友財団の助成を得て実施された。

# 古代墳墓の発掘保護に関する日中共同研究

## 目 的

陝西省西安市では近年周辺地区の開発に伴い、年間150カ所に及ぶ大量の古代墳墓が発見されている。その中に毎年必ず数カ所の壁画墓が含まれるが、その発掘機会を利用し、墳墓発掘時における環境調査と保存処理、及び記録保存に関する方法検討のための研究を日中共同で行い、貴重な壁画情報を収集しつつ、中国の壁画保存に貢献しようとするのが、本研究の目的である

## 成 果

本年度は、以下の内容で事業を実施した。

### 1. 現地調査と光学調査に関する検討

- ・2013（平成25）年8月27日～9月1日の日程で、陝西省延安市周辺で発掘途中の壁画墓（金時代）2基を視察し、発掘現場における光学調査に関する方法を検討した。下描き線を入れて彩色するものと、入れずに彩色するものの違いが明らかになり、また胡蝶などにおそらく黄色の有機色料が使われている可能性を発券するなど、発掘現場における赤外線撮影・紫外線照射撮影調査の有効性を中国側に示すことができた。
- ・2013（平成25）年10月22日、23日の日程で、西安市所在の曲江芸術博物館が開催した第1回壁画芸術研究及び保存修復技術に関する国際会議に招待され、陝西省考古研究院と共同で実施している壁画発掘現場における記録保存に関する研究の成果を発表した。

### 2. 今後の課題についての検討

- ・2014（平成26）年2月23日～28日の日程で、陝西省歴史博物館壁画修復室、河南省洛陽古墓博物館壁画修復室へ赴き、中国における壁画の保存修復に関する課題について聞き取り調査を行った。これまでの調査の成果をもとに、とくに墓室壁画に用いられている有機色料を発掘直後の保存処置やその後の修復作業において失わないための調査方法の確立が必要であることが確認された。

## 研究組織

○岡田健、吉田直人、犬塚将英（以上、保存修復科学センター）、城野誠治（企画情報部）、張建林（陝西省考古研究院）

## 備 考

本研究は、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の助成を得て実施された。

## 名所絵によるアルメニアと日本の文化交流

### 目 的

東京文化財研究所では、海外に渡った日本美術作品の調査を継続的に行っているが、アルメニア国立美術館にはタイトル・作者・制作年代などが不明で展示にも活用できない名所絵版画が所蔵されていた。さらに詳細な調査が必要であると判断されたため、名古屋市博物館の研究協力を得て、2014（平成26）年1月15日から3日間の日程でアルメニアにおいて調査を行った。アルメニア国立美術館の「名区小景」（以下アルメニア本）は、各縦8.1cm、横11.8cmの画面で、29枚が所蔵されており、1847（弘化4）年に刊行された版本『名区小景』初編の挿図が元になっていることが判明した。『名区小景』は尾張藩士で絵をよくした小田切春江によって企画から作画、出版まで手がけられている。内容は名古屋近郊の景勝地にまつわる漢詩・和歌・俳諧を各地から募って自らの絵とともに編集されたもので、巻末には掲載された歌の作者の人名録を載せている。名古屋市博物館所蔵の『名区小景』と比較すると、アルメニア本は画面の上部に各名所の解説を加えて版を改めた改刻版と考えられる。また、どのような経緯でこうした名所絵版画がアルメニアの地に渡ったのか、日本美術作品の海外における受容という点でも興味深い問題を含んでいる。アルメニアではもちろん日本国内でもあまり知られていない作品であるため、今後の調査研究、またアルメニアでの展示公開に活用できるように詳細な情報を集約し、報告書にまとめた。

### 成 果

現地調査を実施して詳細な情報を収集し、所蔵館への情報提供を行った。またアルメニア本の各図の原寸大画像と、通常の『名区小景』とどこが改変されているのかが一目でわかるような形で名古屋市博物館所蔵本を縮小して掲載する報告書を作成し、活用の便を図るため日本語と英語を併記した。

### 刊行物

- ・『コーカサスに渡った日本美術作品—アルメニア国立美術館所蔵『名区小景』調査報告書』（論文：江村知子「コーカサス地方の日本美術作品について」、津田卓子「アルメニア国立美術館にのこる『名区小景』について」）pp.1-64 東京文化財研究所 14.3

### 研究組織

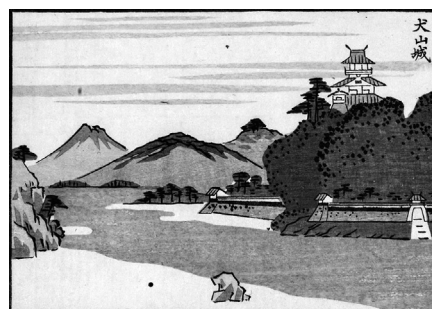
- 川野邊渉、江村知子（以上、文化遺産国際協力センター）、津田卓子（名古屋市博物館）

### 備 考

- 本研究は公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の助成を得て実施された。



「名区小景」（アルメニア国立美術館）



『名区小景』部分（名古屋市博物館）



# 出土漆器からみた桃山文化期における漆文化の解明に関する調査研究

## 目 的

本調査研究は、桃山文化期の日本国内ではどのような漆文化が存在したのかを、年代観や出土遺構が明確な出土漆器や、参考となる年代観がある程度推定される各種の伝世品を調査対象資料として取り上げ、主に自然科学的な分析調査の結果や文献史料調査の結果から解明することを主目的とする。

## 成 果

1. 本研究で調査を実施した資料群は、以下の通りである。

〈出土漆器〉 蝦夷地域である北海道出土の近世初頭期の漆器資料群、大坂城三の丸跡出土の慶長19年埋没の高台寺蒔絵破片、有楽町一丁目遺跡出土の漆塗り部材、(参考：集計作業) 各地で出土した根来系朱漆器  
〈建造物蒔絵〉 大覚寺正寢殿内の桐竹蒔絵(嵯峨蒔絵)

〈伝世漆器〉 南蛮文化館所蔵の初期輸出漆器(南蛮漆器) 資料群、岡山シティーミュージアムの足守文庫寄託高台寺蒔絵桶

2. 北海道出土の近世初頭期の漆器資料群には、広末遺跡・入舟遺跡・大川遺跡などから高台蒔絵やその模造蒔絵の双方出土していた。また、アイヌ伝世資料にも出土資料と類似した蒔絵加飾を有する優品も含まれていた。大坂城三の丸跡の高台寺蒔絵破片は、大坂冬の陣の後埋められた掘内から出土しているため翌夏の陣までの年代観が確定された指標資料であるが、これまで調査を行ってきたやはり年代観が慶長期に特定される都久夫須麻神社本殿内陣蒔絵と材質・技法で極めて類似していた。根来系漆器にはかなりのバリエーションがあり、中世の寺社勢力の本寺・末寺関係のコンネクションが反映されていると判断した。なお、この内容は今年度秋に開催されたMIHO MUSEUMの「根来」展の図録に掲載した。

3. 大覚寺正寢殿の桐竹蒔絵(嵯峨蒔絵)は、高台寺霊屋、都久夫須麻神社本殿、醍醐寺三宝院白書院などの部材に加飾された蒔絵とともに、高台寺蒔絵を代表する桃山文化期の建造物蒔絵である。調査の結果、高台寺霊屋の梨子地粉は青金(Au+Ag)、都久夫須麻神社本殿のそれは銀(Ag)であるとともに、朱線の下絵線もみられるため急ぎ作成された霊廟関係の蒔絵と想定される。一方、大覚寺正寢殿と醍醐寺三宝院のそれはいずれも金(Au)であるとともに、極めて精緻な作りであるため、御殿荘厳を目的とした蒔絵であると理解した。

4. 南蛮文化館所蔵の初期輸出漆器(南蛮漆器) 資料群のうち、5資料について調査を実施した。その結果、洋櫃上蓋に描かれた孔雀模様の蒔絵粉からは真鍮粉(Cu+Zn)が検出されるとともに漆加飾ではなく乾性油加飾であった。後世の補修と推定した。また、このうちの1資料はあきらかに上塗り漆膜面にタイ・カンボジアなどの東南アジア漆に特徴的なチチオール成分が検出された。その一方で、下地はいずれの資料もほぼ同様の泥下地系であった。

5. 岡山シティーミュージアムにおいて調査した足守文庫寄託の高台寺蒔絵桶は高台院縁の木下家什器の一つである。調査の結果、針描の作業状況が良く観察された。

## 研究組織

○北野信彦(保存修復科学センター)

## 備 考

本研究は、公益財団法人高梨学術奨励基助成金の交付を受けて実施した。